

# 附 錄 (第一)

## 各人功績摘要

### 學 校

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
ホーレンス・ケブロン Horace Capron	トーマス・アンチセル Thomas Antisell	チエムス・アール・ワッソン James R. Wasson	エドウィン・ダン Edwin Dun	ウキリアム・ホイラー William Wheeler	セシル・エッチ・ビヘーボ デー Cecil H. Peabody
米國人	米國人	米國人	米國人	米國人	米國人
八七一— 八七五	八七一— 八七四	八七二— 八七七	八七三— 八八五	八七六— 八九六	八七八— 八八一

明治四年開拓使に備聘せられ、開拓使顧問兼假學校教師頭取となり、北海道開拓創業に當り精勵以て其の重責を盡し、八年歸國に際し嘉賞の勅語を賜へり。

明治四年開拓使に備聘せられ、開拓使假學校教師頭となり、ケブロンに隨ひて北海道開拓に功あり。

明治五年開拓使假學校教師として備聘せられ、札幌本道開墾及び北海道地形測量に功あり、後開成學校土木教師となる、勳四等旭日小綬章拜受。

明治六年來朝し、札幌農學校農耕牧畜教師に備聘せられ、牧場及び濕地排水工に功あり。日清戰爭當時は駐日米國公使なりき。

明治九年來朝し、札幌農學校土木工學教師に備聘せられ、後ち教師となり、學事及び道路工事に功績あり、又豊平川橋梁再建に成功せり。

明治十一年來朝札幌農學校土木工學教師ホキラーの後任に備聘せられ、十四年歸國し、後ち大正八年我が國の工學博士の學位を

(7)	ヘー・ダブリフ・パンタ ンク A. W. Unthank	米國人	一八七四	受領せり。 明治七年開成學校教師に備聘せられ、同校の東京開成學校と改稱せらるゝや、同校教師となる。 明治十年來朝し、東京大學創立當時の土木科教師に備聘せられ、在職五年、熱誠を以て其の任を完うせり。勳四等旭日章、工學博士授與。 明治十一年來朝し、東京大學理學部教師に備聘せられ、吾が國に於ける最も價値ある地震計を創造し、又磁力學の發達進歩の基を築き、大正四年吾が國工學博士の學位を受領せり。勳三等瑞寶章拜受。
(8)	ウキンフォイルド・エヌ・チャ Winfields S. Chaplin	米國人	一八七七 一八八二	
(9)	ジェームス・アルフレット・ ニューイング James Alfred Ewing	英國人	一八七八 一八八三	
(10)	ロウ・ワッデル Low Waddell	加奈陀人	一八八二 一八八六	明治十五年東京大學土木教師として備聘せられ、特に吾が國の橋梁技術に一次指針を與へ、大正四年吾が國工學博士の學位を受領せり。勳四等旭日章拜受。
(11)	ヘンリー・ダイエル Henry Dyer	英國人	一八七三 一八八二	明治六年工學寮創設に當り、其の教頭として備聘せられ、來朝後學制を改め、工部大學校を創立し、其の教頭となり、機械及土木工學を擔任し、在任十年、吾が國工學教育の基礎を築き、顯著なる功績を擧げ、大正四年吾が國工學博士の學位を受領せり。勳三等旭日章拜受。
(12)	エドワード・ダイバース Edward Divers	英國人	一八七三 一八九九	明治六年工學寮創設當時より化學教師に備聘せられ、後ダイエルの跡を繼ぎて教頭となり、明治十九年帝國大學理科大學教師となり、引續き居ること前後二十有六年、吾が國化學界に偉大なる功績を擧げたり。勳二等瑞寶章拜受。

(13)	ダブリフ・イー・ホルトン W. E. Ayrtton	英國人	一八七三 一八七八	明治六年工學寮教師として備聘せられ、物理及び電氣學を擔當し、始めて吾が國に電燈を點じ、物理學の進歩發達に大いに貢獻せり。 明治八年工學寮に備聘せられ、引續き工部大學及帝國大學工科大學に於いて地質及鑛山學を擔當し、特に地震學を以て世界的に有名となり、近世地震學の基を築けり。勳三等旭日中綬章拜受。
(14)	ジョン・ミルン John Milne	英國人	一八七五 一八九五	明治八年工學寮に備聘せられ、工學を擔當し、物理學發達に貢獻する所あり、大正四年吾が國の工學博士の學位を受領せり。 明治十二年來朝工部大學校土木教師として備聘せられ、應用重力學及び土木工學を擔當し、學理的・一般土木工學の進展に貢獻し大正四年吾が國の工學博士の學位を受領せり。勳四等瑞寶章拜受
(15)	ジョン・ペリー John Perry	英國人	一八七五 一八七九	明治十五年工部大學校教師として備聘せられ、引續き帝國大學工科大學の教師として前後二十有六年在職し、機械工學を擔當し、特に吾が國造船學及び其の事業の發達進歩に功績を残し、在職中逝去せり。勳二等瑞寶章拜受。東大に胸像建つ。
(16)	トーマス・アレキサンダー Thomas Alexander	英國人	一八七九 一八八六	明治二十年帝國大學教師に備聘られ、吾が邦に於いて始めて衛生工學の講座を擔當し、内務省備を兼ね、上下水道工事に功勞あり、大學滿期退職後内務省の委嘱を受け臺灣に渡り、遂に彼地に於て殉職せり。勳四等旭日中綬章拜受。北臺に銅像建つ。
(17)	チャレス・ディキンソン・ ウエスト Charles Dickinson West	英國人	一八八二 一九〇八	明治三十四年帝國大學農科大學教師に備聘せられ、森林砂防工
(18)	ウィリアム・ケー・バルト ン William K. Burton	英國人	一八八七 一八九九	
(19)	ドクトル・ケー・ハーフェ	獨逸人	一九〇一	

(21)	ウイリアム・ヘッチ・バー W. H. Burr	米國人	一九二九
(20)	アメリカゴ・ホフマン Amerigo Hofmann	奥太利人	一九〇四 九〇九
	Dr. K. Hefele		一九〇三

學を擔當し、告が園林業界に大なる貢獻をなせり。勳五等旭日章拜受。  
明治三十七年フーフエレーの後任として農科大學教師に備聘せられ、森林治水び砂防工學を擔當し、創設以來日尙淺き斯學の完備に盡力せり。勳四等旭日章拜受。  
多年米國に於いて吾が國に厚意を示し、吾が土木工學各方面に大なる貢獻をなす。昭和四年來朝し、多年の功績により勳二等瑞寶章を授けらる。

鐵 道

(1)	エドモンド・モレル Edmund Morell	英國人	一八七〇 一八七一
(2)	ジョン・ダイアック John Diack	英國人	一八七〇 一八七六
	ロジルス	英國人	一八七〇 一八七三頃
	グレイ	英國人	一八七〇 一八七三頃

明治三年我が國鐵道創始の際招聘せられたる最初の鐵道建築師長にして、鐵道創業の際に於ける建築計畫は其の手に成りしが、新橋横濱間鐵道開通の前年在職中逝去す。  
明治三年鐵道掛建築副役として鐵道創設の際備聘せられ、新橋横濱間の測量及び神戸・京都間の測量並に工事を擔當し、九年滿期退職す。  
五人共、鐵道建築助役にして、ダイアック、エンングランド等と共に鐵道建設に従事す。

(3)	ジョン・エンングランド John England	英國人	一八七〇 一八七三頃
(4)	チャルズ・セックハルト Ch. Shepherd	英國人	一八七〇 一八七五
(5)	ウキリアム・ガールウエイ Wm. Galway	英國人	一八七一 一八七六
(6)	エフ・シー・クリスチー F. C. Christy	英國人	一八七一 一八七六
(7)	オインル・スタンホッフ A. S. Aldrich	英國人	一八七一 一八九七
(8)	ゼオナル・シヤン Theodore Shann	英國人	一八七一 一八七八

明治三年鐵道掛建築副役として、モレルに次いで備聘せられ、ダイアックと共に新橋横濱間及神戸・京都間の測量及工事を擔當し明治十年九月建築師長在職中逝去す。  
明治三年備聘せられて鐵道掛副役となり、新橋・横濱間鐵道開通に功あり、又同區間改良及び復線工事計畫に精勵努力し、明治八年在職中逝去す。  
明治四年鐵道掛建築師として招聘せられ、ついで運輸長となり新橋・横濱間開業に功あり、恩賞を賜はり、後ボイルの下に上越線其の他新線路の踏査及び測量に従事し、九年末滿期退職す。  
明治四年鐵道掛汽車監察方として備聘せられ、新橋・横濱間開業式に當り、恩賞として御下賜品を拜授し、九年滿期退職す。  
明治四年鐵道掛書記長兼會計長として備聘せられ、差配役カール歸國後は、同氏に替りて備外國人の上位に立ち、一般鐵道事務の顧問格となり、三十年滿期退職す。在職二十五年餘、恩給年金を受く。勳二等瑞寶章拜受。  
明治四年鐵道掛建築助役として備聘せられ、始め京都・神戸間工事に従事し、後東京に轉じ、六郷川橋梁鐵橋改築等を擔當し、十

(9)	ダンリノー・カーギル W. W. Cargill	英國人	一八七二 一八七七
(10)	アール・ツイカース・ボイ R. Vickers Boyle	英國人	一八七二 一八七七
	キンダール	英國人	一八七一 一八七六頃
	エス・スパーロー	葡萄牙人	一八七一 一八七六頃
(11)	ライナル・ジョンズ T. M. Rymer Jones	英國人	一八七三 一八八一
(12)	デー・アール・セルウキン F. R. Sherwinton	英國人	一八七三 一八八一
(13)	ジョン・マクドナルド John McDonald	英國人	一八七三 一九〇一
(14)	グレゴリー・ホッサム	英國人	一八七三

一年二十九歳の若年を以て在職中病歿せり。  
 明治五年吾が邦鐵道事業創始の際、英國東洋銀行より轉じ、鐵道差配役として雇外人の中心となり、また財務方面に特に功あり、十年満期退職す。勳三等旭日中綬章拜受。  
 明治五年初代鐵道建築師長モレルの後任として備聘せられ、京都・神戸間鐵道を完成し、又中山道線尾張線（大垣熱田間）及び信越線等を調査し、基本計畫を定め、十年満期退職す。  
 鐵道建築師  
 鐵道書記役  
 明治六年鐵道建築師として備聘せられ、關西に在勤し、神戸・大阪・京都間工事を擔當し、大津線開通に至るまで在勤し、十四年満期退職す。  
 明治六年鐵道建築師として備聘せられ、後建築師長となり、京都以東の新線測量及び鐵道建築に功績を擧ぐると共に、大阪工技養成所教師として鐵道技術者の養成に勉め、十四年満期退職す。  
 明治六年鐵道察汽車運轉方兼造車方として備聘せられ、後職工長となり、鐵道工場に勤務し、アント式機關車試運轉に参加し、三十四年満期退職す。在職二十八年、恩給年金を受く。  
 明治六年鐵道察に建築師として備聘せられ、始め中山道其の他

E. G. Hoham			
(15)	ジョン・チャンブルス	英國人	同右頃
	ウオルトル・フィンチ・ペー W. F. Page	英國人	一八七四 一八九九
(16)	ジオルヂ・ダラム George Durham	英國人	一八七四 一八七九
(17)	ダブリノー・ホド・スミス W. M. Smith	英國人	一八七四 一八七八
(18)	デーパーヤル G. Pearsel	英國人	一八七四 一八八〇
(19)	フランシス・ヘンリー・ト レヴィンシク F. H. Trevithick	英國人	一八七六 一八九七
	リチード・フランシス・ト レヴィンシク	英國人	一八七六 一八九七
	グレイ・マクドナルド	英國人	一八七六 一八九七

新線測量及び工事監督に従事し、又大阪工技生養成所の教師となり、後新橋・横濱間の建築師長に轉じ、同區間の改良及び復線工事を主管し、十五年満期退職す。  
 初め京坂神間の建築に従事し、十四年よりホッサムに代り東京に轉ず。  
 明治七年鐵道運輸長として備聘せられ、神戸に在勤し、京都・神戸間全通式に當り、恩賞を拜授し、東海道全通後東京に轉じ、全般の運輸事務を掌り、三十三年満期退職す。在職二十五年餘、恩給年金を受く。  
 明治七年以來鐵道察現場倉方として神戸に在勤し、十二年満期退職す。  
 明治七年鐵道察汽車監察方として備聘せられ、神戸に在勤し、京都・神戸間全通式に當り、恩賞をうけ、十一年満期退職す。  
 明治七年十月建築助役として大橋、釜石港間運炭鐵道敷設に従事後、鑛山土木師となれり。  
 明治九年鐵道汽鍋方頭取として備聘せられ、後、新橋汽車課汽車監督となり、アント式機關車試運轉に成功し、三十年満期退職す、在職二十餘年、恩給年金を受く。勳三等瑞寶章拜受。  
 汽車監督  
 汽車運轉方

(20)	フレデリック・ライト B. F. Wright	英國人	一八七八— 一八八八	明治十一年以來鐵道局汽車監察方として新橋及び神戸に在勤し、二十一年在職中病歿せり。
(21)	ジョセフ・ユー・クロフォ Joseph U. Crawford	米國人	一八七八— 一八八一	明治十一年末開拓使に備聘せられ、鐵道建設兼土木顧問となり、北海道に於ける鐵道の嚆矢たる小樽幌内炭鑛鐵道敷設を設計し札幌小樽間を竣工し、また函館水道を調査設計し、十三年東京青森間鐵道路線を踏査せり。勳四等旭日小授章拜受。札幌に胸像建つ。
	シ・デ・ブロウ シ・デ・ブロウ	米國人	一八八〇—	土木師補 六人共、明治十三年米國派遣のクロフォオルドの歸朝に際し、北海道に伴ひ來れる人々なり。
	エッチ・ホロウエイ エッチ・ホロウエイ	米國人	同 ?	器械師
	ジョン・レノルツ ジョン・レノルツ	米國人	同 ?	造軌師
	ジョン・ホワイラン ジョン・ホワイラン	米國人	同 ?	造軌補手
	ステフエン・デ・ウイン ステフエン・デ・ウイン	米國人	同 ?	鐵道築橋師
	デ・チストリック・ランド デ・チストリック・ランド	米國人	同 ?	造車師
(22)	チャールズ・アセトン ダブリュー・ハズネル C. A. W. Pownall	英國人	一八八二— 一八八六	明治十五年吾が邦に備聘せられたる英國人最後の鐵道建築師長にして、二十九年退職歸國す。在職十四個年、吾が邦鐵道事業勃興時代に能く其の任を全くせり。勳三等瑞寶章拜受。

(23)	ヘルマン・ルムシュォッテル Hermann Rumschötel	獨逸人	一八八七— 一八九四	明治二十年九州鐵道會社創設に當り、顧問技師に備聘せられ、在職五年、其の間別子鐵道及び上野・新橋間東京高架鐵道の設計を委囑せられ、二十七年歸國せり。勳四等瑞寶章拜受。
	ルイ・ガランド ルイ・ガランド	獨逸人	一八八九—	明治二十二年ルムシュォッテルの呼寄せる九州鐵道の職工長なり。
	カル・チウヒシング カル・チウヒシング	獨逸人	同 ?	同上の運轉師なり。
(24)	フランツ・バルツヘル Franz Balzer	獨逸人	一八九八— 一九〇三	明治三十一年備聘せられ、逓信省顧問技師として吾が邦最初の新永間(新橋・永樂町間)高架鐵道建設に従事し、三十六年歸國。勳四等瑞寶章拜受。
(25)	ルドルフ・ブリスケ Rudolf Briske	獨逸人	一九二三— 一九二七	大正十二年來朝の獨逸國シメンス會社東京出張所主任にして、地下鐵道株式會社の囑託となり、吾が邦最初の地下鐵道建設工事に技術的援助を與へたり。
(26)	ロバート・リッジウエイ Robert Ridgeway	米國人	一九三〇—	紐育市技師長として在米吾が邦土木技術者に、懇切なる教導をなし、昭和五年來朝す。勳三等瑞寶章拜受。

河川・港灣・燈臺

(1)	フランソワ・レオン・ヴェ ルニー Francois Le'on Verry	佛蘭西人	一八六五— 一八七六	慶應元年徳川幕府に招聘せられ、上海より渡來し、主船寮横須賀造船所造船首長として、海軍土木師長として、横須賀造船所及び燈臺等の創設に盡力し、在職十有二年、明治九年春歸國せり。
-----	---	------	---------------	--

	フロラン	佛國人	一八六八頃	ヴェルネーの助手にして、明治元年頃燈臺建築に従事す。
	チボン	佛國人	一八六八頃	同
(2)	ギール	英國人	一八七七— 一八七八	明治十年十一月頃神戸小野濱造船所を設計す。
	アール・ヘンリー・ブランチン R. Henry Brunton	英國人	一八六八— 一八七六	明治元年來朝し、燈臺機械方頭となり、又大阪、横濱築港の計畫をなし、明治二年日本最初の「かねの橋」を横濱に造り東京・横濱間鐵道敷設に就て意見書を提出し九年任期満ちて歸國せり。 兩人共、明治元年より十年迄本國にありて日本政府の土木顧問たり。
	デー	英國人	一八六八— 一八七七	兩人共、デーの推薦により來朝し、燈臺築造助手となる。
	デー・スタブソン	英國人	同 ?	
	マクヒン	英國人	同 ?	
	ブランドル	英國人	同 ?	
	パリ	英國人	同 ?	同、燈臺築造方補員、修技校教頭。
	ジェームス・マクリッチ	英國人	同 ?	同、築造主任ブランチン満期後之に代る。
(3)	コルネリ・ヨハネニス・ファン・ドールン Cornelis Johannes Van Doorn	和蘭人	一八七二—	明治五年二月來朝の内務省御雇土木長工師にして、治水港灣灌漑等に功あり。其中安積疏水は著明なるものなり。明治十三年二月歸國す。勳四等旭日小綬章を賜はる。

	ファン・ドールン Cornelis Johannes Van Doorn	和蘭人	一八八〇	漑等に功あり。其中安積疏水は著明なるものなり。明治十三年二月歸國す。勳四等旭日小綬章を賜はる。
(4)	イ・ア・リンダウ I. A. Lindow	和蘭人	一八七二— 一八七五	明治五年二月來朝の内務省御雇土木工師にして、治水に功あり、八年歸國す。
(5)	ゲ・ア・エッセル G. A. Escher	和蘭人	一八七三— 一八八〇頃	明治六年九月來朝の内務省御雇土木工師にして、治水港灣に功あり、十三年頃歸國す。
(6)	ヨハニス・ドリーケ Johanns Drijke	和蘭人	一八七三— 一九〇一	明治六年九月來朝の内務省御雇土木工師にして、治水に功あり、九年頃歸國す。
(7)	ア・ハ・ナ・ナ・チッセン Tuschen	和蘭人	一八七三— 一八七六頃	明治六年九月來朝の内務省御雇土木工師にして、治水に功あり、九年頃歸國す。
(8)	バース・ウエストル・ウイ	和蘭人	一八七三—	明治六年十一月來朝の内務省御雇土木工師にして、治水に功あり、九年頃歸國す。
(9)	イ・ア・カリス	和蘭人	一八七五—	明治八年五月來朝の内務省御雇工手にして、治水港灣現場作業を指導せり。歸國年月不明。
(10)	デ・アルンスト	和蘭人	一八七三—	明治六年頃來朝、内務省御雇工手にして、治水港灣現場作業を指導す、歸國年月不明。
(11)	ファン・マイトレクト	和蘭人	一八七三—	明治六年頃來朝、内務省御雇工手にして、治水港灣現場作業を指導す、歸國年月不明。
(12)	ル・エンホルスト・ムルデ Mulder	和蘭人	一八七九— 一八九〇	十二年三月來朝の内務省御雇土木工師にして治水、運河、灌漑港灣等に功あり、利根運河は彼の手に成りたるものなり、二十三年

(13)	ヨハン・ユタルト・フアンデント J. G. Van Gendt	和蘭人	一八七九〇
(14)	シー・エヌ・メイク O. S. Meik	英國人	一八八七〇
	ルノー Renand	佛國人	

五月歸國す。勳四等に敘せらる。  
 明治十二年開拓使石狩河口改良水理工師に招聘せられ、森港埠頭改良の計畫をなし、石狩河口築港調査中横濱にて病歿せり。  
 明治二十年北海道廳に招聘せられ、道内各地方の港灣を調査して報告をなし、將來施設上の參考に供したるもの多し。  
 明治二十一年十一月東京市區改正委員会より、在パリートのルノーに東京港築造意見を徴せられ、同工事に對する卓越せる指針を與へたり。

道路・橋梁・上下水道

(1)	エー・チー・ワルフキール A. G. Warfield	米國人	一八七二
(2)	ゼー・ムス・アール・クラーク James R. Clark	米國人	一八七二
(3)	エヌ・エフ・リド・ホルト N. W. Halt	米國人	一八七三
	リンボール	英國人	一八七三
	ウォルトマス	英國人	一八七三

明治四年北海道開拓使に招聘せられ、測量兼道路築造長として、函館・札幌間官道開鑿工事に従事せり。  
 明治五年開拓使雇教師となり、日本語に通じ、札幌本道開鑿工事に補助兼通譯として従事せり。  
 明治六年開拓使機械使用長に備聘せられ、豊平川橋梁(北海道最初の洋式橋梁)を架設せり。  
 三人共、明治六年より十年頃迄、銀座大火の後煉瓦造家屋及道路の築造に従事せり。

(4)	ウオルトロス	英國人	一八七三
	ヘンリー・スペンサー・パーマー Henry Spencer Palmer	英國人	一八八三
	ハロルド・デ・ラースロフ	米國人	一八八九
	フランク・ウォルキンシヨ	英國人	同 ?
	エー・エフ・イックナツ	英國人	同 ?
	ジョンズ	英國人	同 ?
	バクボルト	英國人	同 ?
	ジョンソン	英國人	同 ?
(5)	サミュエル・ヒル Samuel Hill		一九一八
	チャールズ・エー・ピア Charles Austin Beard	米國人	一九二二

明治十六年來朝し、吾が邦に於ける洋式上水道の先驅たる横濱水道工事を完成し、更らに横濱築港の設計及監督をなせるも、竣工に先ちて病歿せり。勳三等旭日章拜受。  
 明治二十二年よりパーマーの下に横濱築港に従事の工事助手。

同、機械係  
 同、職工長  
 同、同  
 同、同

大正七年十一月來朝、(九年にも十一年にも来る)熱心に道路改良のことを我が國朝野に勸説し、同年道路法案議會通過の一因をなし、道路事業に貢献せり。勳三等瑞寶章拜受。  
 經育市政調査會専務理事たりし氏は、大正十一年九月、東京市長後藤新平子爵が市政調査會顧問として招聘せられ、十三年東京

(7)	ヘーネッチ・ヒューズ A. H. Hughes	米國人	一九二四 一九二五
(8)	ヘル・アール・クラフト L. R. Craft	米國人	一九二四 一九二六 一九三六 一九三七
(9)	ヘッチ・ヘングランダー H. Englander	米國人	一九二四 一九二五
	ポールス Palls	米國人	一九二三 一九二六
	シューメーカー Shoe Maker	米國人	同
	レプ Lepco	米國人	一九二二 一九二二
	スミス Smith	米國人	同
	バーレンタイン Valentine	米國人	?
	ジェンキンス Jenkins	米國人	一九二六

復興事業にも來りて有益の助言をなす。我が國市政及び都市計畫の功勞者なり。  
 大正十三年復興局に招聘せられ、永代、清洲兩橋梁の橋臺基礎灌漑工事に従ひ、ついで關西線木曾川及揖斐川橋梁に同様工事に従事せり。灌漑技師なり。  
 大正十三年復興局に傭聘せられ、永代、清洲兩橋々臺竣成後、關西線木曾川揖斐川兩橋梁工事に従事し、後昭和三十二年再び來朝せり。灌漑技師なり。  
 大正十三年ヒューズ、クラフト兩氏と共に永代、清洲兩橋梁灌漑工事に従事せり。  
 兩人共大正十二年末より同十五年頃まで日本石油會社に傭聘せられたる道路技師にして、明治神宮外苑、阪神國道鋪裝に従事せり。  
 兩人共米國テキサス石油會社技師にして、大正十年同十一年頃東京市囑託として下谷車坂町附近アスファルト鋪裝を擔任せり。  
 トリニダッド會社道路技師にして、東京市内幸町東西道路のアスファルト鋪裝に従事せり。  
 ポールス歸國後來朝し、道路鋪裝工事に従事せり。

雜

(1)	ウキリアム・ビー ブレイキ William P. Blake	米國人	一八六二 一八六三
(2)	アール・ポンペリー R. Pompey	米國人	同
	エラスムス・ヘッチ・ヘム ガール E. H. M. Gaware	米國人	一八六六 一八七〇
	ゼームス・モロツト	英國人	一八六九 前後
	マクウエン 外五人	英國人	一八七一 ?
	エドムント・ナウマン	獨逸人	一八七八 一八八五
	軍艦シルビヤ	英國	一八七〇 一八七一頃
(3)	ベンジャミン・スミス・ライマン B. S. Layman	米國人	一八七二 一八八一
(4)	ヘンリー・エス・ムンロー レネクロード・ポルネ・ゴ	米國人	一八七二 ?

兩人共文久二年徳川幕府により蝦夷地鑛山開發の爲め傭聘せられたる鑛山師にして、新式探鑛法を教へ、幕府騷擾に遭遇し、僅かに一年にして歸國す。  
 慶應二年徳川幕府に傭聘せられ、明治初年北海道茅沼炭山の起業を竣成し、吾が國に於いて創めて軌道にて石炭輸送をなせり。  
 明治二年ガールの下に北海道茅沼炭山事業に従事す。  
 明治四年工部省測量師長として招かれ、東京京都大阪等の三角測量をなせり。  
 明治十一年より我國地質地形測量を指導せり。  
 明治三年より内地沿海測量に協力助成せり。  
 明治五年開拓使に傭聘せられ地質兼鑛山士長となり、北海道炭鑛の開發に功あり、北海道地質及地形圖を創成し、又内地鑛山調査をも擔當せり。  
 ライマンの助手  
 明治十二年招聘せられ、開拓使傭備の鑛山工師となり、幌内炭山



ウジヤウ Ganjot	米國人	一八八〇
ジョゼン・ヘッチ・ダウス	米國人	一八七九
エドワルド・パレー	英國人	一八八二
(5) モルレー・ヘス・デー	英國人	一八七九
M. S. Day	米國人	一八八二
(6) ジョナタン・ゴープル	米國人	一八七三
Jonathan Gobie	米國人	一八七六
		一八六〇頃
		一八七一頃

の採炭及岩内炭山の改良に従事せり。  
 ゴウジョウに隨つて來朝し、坑夫頭として従務す。  
 右に同じ。  
 明治六年開拓使雇となり、北海道全道に互り、三角法による地形  
 測量に従事せり。  
 萬延元年宣教師として渡來せしが、我が國に於いて人力車の考  
 案及び改良に貢献せり。

## 附 録 (第二)

### 工 部 大 學 校 昔 噺

大學の起源就中工部大學の事に就きては「工部大學校昔噺」なる先輩諸氏の追憶談記事  
 冊子あり、明治初年の大學工科側面史として面目躍如たるものあるを以て、其の要點を左に  
 拔萃して附録となすこととなせり。

#### 1. 明治初年の工業と工部大學校のことども

工學博士 石 橋 絢 彦 氏 談

石橋博士は、工部大學校第一回の土木科卒業にして、工學部卒業者中最も古き先輩の一人なり。目下逗子に閑居せら  
 る。即ち訪ひてこの談話を得たり。

#### 山尾庸三子爵の事

我が國の工業界及び工部大學校の話をする前に、先づ山尾先生の話をしなければな  
 らない。先生は工部大學校の建設者であり、且我國工業界の大恩人であるからである、山尾

先生は周防の人、長州藩士である。若くして志を立て、江戸に出で、木戸孝允を頼り、村田清風(長州藩の用人)の世話で、江戸九段の劍士初代齋藤彌九郎の塾僕となつた。彌九郎の門下には木戸孝允、渡邊昇、井上勝、楠本正隆、關口隆吉等の俊秀が居り、木戸はその隊長であつた。文久元年安藤對馬守を坂下門に暗撃した時には山尾さんもこれに加盟して居り、討幕攘夷を主張し、文久二年高杉晋作等の横濱外人館焼拂ひの血盟書にも名を連ねたが、事を擧げた時には先生は加つて居なかつた。かくて先生は先輩吉田松蔭が所謂「知敵而後戦」を主義とする攘夷の志を繼いで自身も渡歐を企て、村田清風に資金を仰いだ。

當時佛國は幕府に力を入れてゐたが、これに對抗して英國は長州の後押しをして居た。その關係で長州の彼等は首尾よく英國へ留學する事が出来た。即ち横濱のスコットランド商館、ジャーデン・マヂソン會社が一切を引受け、先生は文久三年伊藤博文、井上馨(當時志道聞太)遠藤謹助、井上彌吉(井上勝)と共に都合五名でロンドンに渡つた。博文と馨は在英一年で馬關砲撃の事を聞き、急いで平和説得の爲め歸國したが、他の三人は滯英することになり、遠藤は經濟學を習ひ、歸朝後大阪造幣局長となつたが明治二年に早死し、井上勝はドクトル・ホールに鑛山學を習ひ、歸朝後鐵道を創設した。そして先生は永い間ロベルト・ネビヤの造船所に入つて職工として働いたのであつた。蓋し邦人がアプレンチスになつた

始めてあらう。かくて先生は明治二年歸朝せらるゝや、既に明治政府の要職にあつた伊藤博文の推薦で、この時に始めて出来た民部省の役人となつたが後に權大丞と成り、横濱の製鐵所を引受けた。

工學寮創設と  
鑛山改良

先生が最も力をそゝいたのは、工部大學と鑛山とである。鑛山といつても後に述べる通り當時は皆事業不振であつて、其の經營は中々の困難であつた。元來工部省の出来たのは先生等の鑛業振興建議が與つて力あつたらしい。そこで先生は釜石・佐渡等に力を注ぎ、鑛山に對する鐵道の敷設をなし、又從來狸掘の穴であつたのを所謂坑道に改める等甚だ大仕事の仕事にかゝつたのであつた。

工部大學、即ち時の工學寮もまた先生の建議によつて設置せられたものであつて、大學の南校と異り、學理に實地を加味した工學を起さんとし、これが爲めに「外國教師を聘し、以て生徒を教育し、成績を後年に期せん」と遠大の計を立てられ、これが政府の容るゝ所となり、先生は工學頭に任ぜられたのである。これは明治八年のことであつた。この後も色々の計畫を立てられ、十二月には工部少輔となられて後他に轉ぜられた。

### 明治初年の工業

明治初年に工業が如何なるものであつたかは、工學に關係するものゝ興味ある問題であ

らう。

明治前の工業は皆手工業であつて、機械工業はなかつた。そして手工業といつても其の最も大規模なものは鑛山であらう、わが國の鑛山は戰國の頃から著しく盛んになつたといはれてゐるが、而も維新前は幕府及び諸藩の支配下に在り、統一が無かつた。佐渡金山は上杉謙信のものであつたが、秀吉から徳川幕府に移り、生野銀山は長州、小坂は秋田、筑前の石炭は黒田藩といふ有様であつた。之を明治政府の管轄に統一して從來の方法に改良を加へたのが山尾先生である。

明治創業の際には、之等の鑛山は甚だ衰微して居つたのであるが、それに對して山尾先生は歐洲の新知識をかたむけて新工事を施されたのであつた。

さて造船界を見ると、鍋島閑叟公は早く長崎造船所を建てたが、又江戸で蒸汽船を造つた。長崎造船所は、幕末勝海舟が幕府の命で矢田堀鴻と共に年三千圓をもらつて海軍練習處としたが、後に工部省から海軍の所有に歸した。

又佐賀藩では江戸の佐賀屋敷(日比谷)で、外國形のボイラーを作つた事がある。此の時面白いことには全部之を銅で作つたが、出来上つて見ると大きいので室から出ない。窓などを壊してやつと運び出したが、品川沖で舟に据付け、さて試運転となると壓力が上らず、

おまけに漏つて失敗したといふ挿話もある。なほ佐賀藩では外國から機械を買つて、これを幕府に獻じたことがある。幕府は之を石川島の空地へ置いた。山尾先生は之を使つて横濱に製鐵所を作らうとしたが、後工部省から海部省が出来て、之に移管されてしまつた。

製鐵所といへば、前に山尾先生が引受けたといつたのは横須賀造船所の前身で、之は明治元年小栗上野介が造船所の名目で製鐵所を經營しようとして作つたものである。これは計畫中に既に幕府瓦解の兆が見えてゐたが、小栗はかまはず事業を遂行した。これは倉附で財産返上としての添物とする下心だつたらしく思はれる。

洋式燈臺創造  
始末

次に土木方面を見ると、最初が燈臺である。燈臺建設のことは、前に述べた馬關砲撃事件で、三百萬弗の賠償金と共に燈臺を十ヶ所に建設する條約を結んだのが濫觴となつた。わが國では當時日本に居たアール、コックに頼んで香港から電報を打つて(當時香港からでなくして電報は打てなかつた)スコットランドの技師ステブソンに依頼し、彼がよこしたのがアール・ヘンリー・ブランドンであつて、之が明治元年六月である。また、佛國からホボン

が来て、品川・觀音崎・野島ヶ崎に燈臺を作つたのが明治二年一月であつた。築港はこれよりも遅れて始められ、十一年五月蘭人工師エッセルが坂井港に着手したのが最初で、彼は工費三萬九千圓と計上したが、後デレーケが七萬九千圓と見積り換へして出来上つたのが

初期の築港

明治十八年で、これには結局三十萬圓を費したといふ。また野苺港は蘭人ファン・ドールンの意見で、十一年七月に着手したが、汽力の浚渫船を使用した。

機械工業と見るべきものは、工部省の建てた工作局といふもので、之は後に海軍が引繼いで赤羽根にあつた。

また嘉永年間佐賀、鹿兒島等に反射爐があつた事は事實だが明かでない。有名な江川太郎左衛門の葦山の反射爐は幕命で嘉永六年に作つたのである。前に話のあつた遠藤謹助が明治二年大阪造幣局を創設したが、之に英國技師が来て製鐵爐を設けたといふ。

應用化學方面では明治十四年深川に煉瓦工場を建て、十六年これを淺野總一郎に貸し、翌年拂下げたのが、セメント工場の始めらしい。その他硝子製造所も此處にあつた。

かくの如く日本の工業は明治に至り始めて大規模になつたもので、之等はその殆んど全部が外國人の手で作られたものであつた。之は五ヶ條の御誓文の中の「廣く知識を世界に求め」とある精神に依つたもので、實に一大英斷であつたのである。然るにこれが明治二十年前後には、之等の殆んどすべては日本人の手に依つて經營されるに至つたのである。

工部沿革史によると、東京府下を正式に測量したのは明治四年十月二十七日で、皇城内富士見橋に紅白の三角旗と工學の測量標旗を押立てたのが始まりであつた。この時は令を發

東京府下新式  
測量の初め

して邪魔になる林や藪は相當の價を給して伐除し仕事を始めたといふ。まことに嘘のやうな本當であつた。

當時工部省がかゝる諸種の工業新施設に費した金額は、何でも七百萬圓といはれてゐるが、之は當時としては實に莫大な金額であつた。然るに之等の施設も明治十四年太政官の經費節約で皆民間に拂下げになつて了つた。三菱、三井、藤田、古河組等が之等の拂下げをうけたもので、三池の鑛山など二十年月賦で、二百萬圓位で落札になつたといふことである。次に鐵道方面を見ると、計畫は早くも明治以前、即ち慶應三年十二月二十三日に、當時の

鐵道創設始末

幕府老中小笠原壹岐が米國公使館書記ホルトメンに交渉して、米人の手で京濱間鐵道敷設の計畫を進めたが、政權奉還の際で話は空に歸した。然るに明治二年政府は東京・京都・大阪と、奥羽其の他に鐵道を敷設するの廟議を決し、先づ、東京大阪間、東京横濱間及び琵琶湖から敦賀港への線路を豫定し、十月に至つて京濱間を經費五十萬圓で商人に請負はしめようとしたが、商人の方が危ぶんで應じないので、之も亦畫餅に歸した。そこで之ではいけなうといふので、民部兼大藏卿伊達安城、大輔大隈重信及び小輔伊藤博文等が建築事務を取つて、先づ百萬磅の外債を募る事になり、大藏大丞上野景範が英國に行つてロンドン東洋銀行で之を募集した。かくて明治三年三月に、民部大藏兩省内に鐵道掛を置き、監督正上野が總

理となつて、英人エドモンド、モレルが建築首長で、汐留と横濱から線路測量を始めて、品川新橋間の竣工をしたのが明治五年九月十二日、明治天皇が御親臨あらせられて盛大なる開通式が舉行され、翌日から旅客運輸を始めた(貨物は六年九月から)。そして一方神戸大阪京都間の工事にも着手して、神戸大阪間が七年五月、大阪京都間が十年二月、京都大津間が十三年七月開通したのであつた。

工部大學校備外國人各務擔當表 (表中月給額は壹弗を壹圓とす)

本校、創立以來、明治十八年に至る迄に徵備せし外國人の姓名給額等を掲ぐれば左の如し。

國名	人 名	職 名	月 給	結約年月日	解約年月日
英吉利	ヘンリーダイエ	都檢兼土木及機械學教師	六〇,〇〇〇	明治六年六月三日	明治十五年六月一日
同	ダイバース	降教頭兼化學教師	五〇,〇〇〇	同 六年七月一日	同 十八年十二月文部省ニ轉ズ
同	エルトン	電信及理學教師	五〇,〇〇〇	同 六年六月三十日	同 十一年六月二十九日
同	ミルン	金石地質及鑛山學教師	五〇,〇〇〇	同 九年三月八日	同 十八年文部省ニ轉ズ
同	マーシャル	理學 教師	五〇,〇〇〇	同 六年六月三日	同 十四年三月二十六日
同	プリンクレイ	英文學教師	五〇,〇〇〇	同 十一年七月一日	同 十三年十二月三十一日
同	コンダー	造家學教師	五〇,〇〇〇	同 十年一月二十八日	同 十五年一月二十八日 營繕局ニ轉ズ
同	アレキサンドル	土木學教師	五〇,〇〇〇	同 十二年三月十九日	同 十八年十二月文部省ニ轉ズ

同	タムソン	土木及測量學助教師	三三,〇〇〇	同 十一年八月四日	同 十四年六月三十日
同	ヘルリ	土木學助教師	三三,〇〇〇	同 八年九月九日	同 十二年三月三十一日
同	ウエスト	機械學教師	三〇,〇〇〇	同 十五年八月十六日	同 十八年十二月文部省ニ轉ズ
同	アングラス	機械學助教師	三〇,〇〇〇	同 十一年八月四日	同 十四年六月三十日
同	コーレイ	機械學助教師	二〇,〇〇〇	同 六年六月十九日	同 十一年六月十八日
同	メンデキソン	英學 教師	二〇,〇〇〇	同 十三年一月一日	同 十八年十二月文部省ニ轉ズ
同	テキソン	英學 教師	二五,〇〇〇	同 九年八月二十日	同 十二年十二月三十一日
同	クレゲイ	英學 教師	二八,〇〇〇	同 六年七月一日	同 九年十二月二十九日
同	ブリンドリー	工夫總長兼技術教師	三三,〇〇〇	同 八年十二月十四日	同 十四年六月工作局ニ轉ズ
同	グレイ	電信學教師	三三,〇〇〇	同 十一年十月五日	同 十四年六月三日
同	モンデー	圖學 教師	二八,〇〇〇	同 六年七月一日	同 十一年六月三十日
同	バ	圖學助教師	三三,〇〇〇	同 十一年八月四日	同 十四年六月三十日
同	クラーク	圖學 助手	一五,〇〇〇	同 六年六月十九日	同 十一年六月十八日
同	キン	模 型 師	一四,一八〇	同 六年六月三日	同 八年六月十八日
同	ジョンズ	測量學及小學教師	三五,〇〇〇	同 六年一月一日	同 十一年八月三十一日
同	ハミルトン	小學 教師	三〇,〇〇〇	同 七年七月一日	同 十年四月三十日
同	サンデマン	小學 教師	一〇,〇〇〇	同 七年一月二十日	同 七年十一月三十日
同	ジョルジ	小學 教師	一〇,〇〇〇	同 七年二月一日	同 七年六月三十日

同	ラクデン	小學教師	二〇,〇〇〇	同七年十二月一日	同十年四月三十日
同	マクレ	小學教師	三〇,〇〇〇	同八年一月十一日	同十年六月三十日
伊太利	サンジ・パンニ	畫學教師	三〇,〇〇〇	同十三年五月十三日	同十六年二月十一日
同	フレッチ	畫學教師	二七,七〇〇	同十一年十月一日	同十三年一月三十一日
同	ホンダネジ	畫學教師	二七,七〇〇	同九年八月二十九日	同十一年九月三十日
同	ペロリ	畫學像科教師	一〇,〇〇〇	同十三年二月二日	同十三年七月三十一日

因に、此頃は米が一石七、八圓、人力車で一日乗り廻しても一圓か、らぬといふ世の中であつた。

## 2、學生々活之面影

工部大學にありては、スコットランド風其の儘の學校生活を、日本に移さんといふ山尾子爵の計畫に従つて萬事が行はれたり。明治初年には珍らしき七十萬圓の大建築の中の生活振りには、洋服、食事、罰則等に、今日にありては思ひ及ばざるやうな異國風を見たり。依つて以下當時十七歳で大學の寮生活をせられし最初の日本人、數人の先輩の談話を掲げて、その一端を示す。而してこれらの先輩は何れも七旬、八旬の高齡にして、宛も祖父に接するの思あらしむ。然れどもこれらの祖父はまた何れも尋常の祖父にあらずして、等しく明治工業の先覺にして、未曾有の大事業を遂げ、稀有の成績を擧げたる功勞者なりしなり。而してま

たこれらの先輩諸氏は、當時世界にありては、日本はなほ支那の屬國の如くに思はれるたりし頃、若冠にして遠く歐洲に學びしものにして、轉た今昔の感深きものあるを覺ゆ。

土木 石橋 絢 彦氏談

(其他二三人の談あれども極めて簡短にして、此範圍を出でず、省略)

日常生活は、寮生活であつたから、共同の動作をしたもので、室は六人割で床は板張りであつた。朝六時から七時三十分まで習學、鐘聲で起き、井戸端で顔を洗ふ。七時三十分から八時まで朝食。十間に二十間位のホールに行き、皿盛り一杯の飯を味噌汁で食事をする。八時から十二時まで授業、十二時から一時まで中食、中食はパン半斤と洋食が付く、四時まで授業、ついで五時まで體操、五時から六時が夕食、野菜、魚で飯である。其の後二十疊位の大さの風呂(スチームで温めた)に皆が一度に入つて、夕方の散歩に行く。門限は九時である。

正式の規定は前に述べたやうなものだが、なか／＼うは行かない。痛切に身にこたへるのが晝半斤のパンで、之では到底腹が承知しない。といつて規定は半斤以上を與へてくれぬ、苦心の結果目を付けたのが製圖用のパンである。之は消ゴムの代りに使ふのだから、量の制限なしにされる。だから之を貰つてその硬い所をたべ、わづかに飢えを凌いだこと

などあつた。まことに無邪氣であつた。夕食に賄征伐もやつたものである。夕方の外出時間には二時間であるが、十時の點檢の時歸つて居る事にして貰つて、寄席などへ行つたものである。十時消燈だが、試験前はよく蠟勉もやつた。中にはランプに覆をかぶせて夜廻りの目をごまかすものもあつた。また階段の所にある常夜燈の下で立つて勉強したものもある。日常の物品は全部官給で、従つて小遣はくれなかつた。但し襯衣及び整粧の具は總て自費たるべし、と規定にあるし、寮中へ食物を持來り且酒品を用ゐるを禁ぜられてゐた。煙草は喫煙室でのめたが、寮中使役の從僕は官より給する故に、生徒が勞錢を與ふるを禁ぜられて居た。病氣をすると病院に入れて呉れた。

面白いのは、寮則に戻り、或は諸官員教官に對し無禮無儀なる者は、次の罰則を喰ふ。

- 一、當直の外三日間室中の洒掃を執らしむ。
- 二、一週間室内の同右。
- 三、三日間從僕に代り館中の洒掃等に服す。
- 四、一週間同右。

而して、これ等の輕重は、寮長都檢(教頭)集會商議の上、實跡を證するに依つて物々しく決定されたものである。それ以上は退校である。

## 工部大學の正服正帽

當時は制服を給せられてをり、外出は正服正帽である。正服はラシヤ地でツメ襟、前にボタンが附いて居て、胸の兩側は下でひだが取つてあり、乳の下に横へカクシが附いてゐた。バンドは服の上からしめた。正帽は角帽ではない。今のお茶水附屬幼稚園の帽子のやうな三角の上を折つたもので、頂上に丸い玉が附いたお釜帽子で、額に櫻の中に「工」字を附けた徽章に、背部には二本のリボンが下つてゐた。當時習つてゐたものは、教科書としてウキリースのセリースや、ランキンの土壓公式までも教へられたし、またノートの授業もあつた。學校中央の書房には之等の本があつて、各自取出して室の隅で讀んだ。教室は今と同様平床で、一つ階段教室があつた。

數學は微積までやり、理學は動作の理、勢力の理動法、水理、水勢理、大氣論、熱、マグネチズム、電氣は電信が最上で、まだ電話などはなかつた。理學には、究理學、音聲學、天文まで含めてあつた。測量、鑛物、造家は全體大した變りもないが、造家はコンクリートは未だない。亞土、和土、人造石製法といふやうな事もやつた。製圖は今の様でなく、勿論實物の設計もあつたが、とにかく諸機械がないので、機械模型の設計圖をかかせ實地修業で之等の模型を作らせた。(石橋氏の作つた弧形橋梁の模型は土木教室に存在すると思はる)毎年後半期の實習は東京附近の工場に行つたが、私の最初に行つたのが赤羽根の工場で、六ヶ月かか

つて六角ナットを作つたが、いくつも出来なかつた。卒業前の二年の實習は地方に行く。この實習には手當五十錢を支給されたものである。明治十年常陸の鉾田に測量にやられた時は、測量を早く済ませて筑波山へ登らうと云ふ事になつたが、五日かゝつて歩いた。同勢五人全體で五圓の金があつたので、一人當り一日二十錢づつ使へるわけだが、晝は握飯で朝夕旅宿で飯を食つて十三錢しかかゝらなかつた。其後鉾田、大貫の運河設計を、十一年には秋田の船河港八郎瀉の設計をやつた。之は五ヶ月かゝつた。

一般に謂つて、工部大學は大學南校より實地はすぐれてゐたが、數學の力などは劣つてゐたやうであつた。

とにかく、かうやつて卒業したのが、明治十二年で、卒業後の生活には困らなかつたが、當時學生は卒業すれば參議にして呉れるものと考へて、參議熱の旺盛な時だつたのに、卒業して見れば二十五圓の判任官で、最高が六十圓、學校出は昇進が早いだけで、幻滅の悲哀を感じたものである。

## 附 録 (第三)

### 大學生の制服制帽徽章の由來

昭和四年十一月學士會月報五〇〇號及帝大五十年史其他による

#### 制帽のこと

和田 義 陸氏談

氏は明治十八年東京大學南校卒業の理學士にして土木專攻

自分は明治十年頃一ッ橋の英語學校より大學豫備門へ轉校し、ついで寄宿舎へ這入つた。十三年頃學生達の運動不足を感じたので、各種の運動を起し且つこれを普及させようと、同校學生達と協議し、嘉納治五郎氏に相談して、柔道の稽古を始めた。また其の時教授及び文部省高官達に寄附金を仰ぎ、ポート三隻を新造して、隅田川で毎日練習した。これ東京に於けるポートレースの發端なりと信ず。尙ほ運動好きの米人技師ストレンヂに就いて野球、庭球其他の陸上競技を始めた。其の外遠足會を作り毎月一回往復十里以内の地に遠足することゝした。

ポートレース  
の  
庭球の  
始め

角帽の濫觴

かつて學生墮落事件を起した事があつた。そこでこれが防止方法として正服正帽を一定



せんと、大學生及び豫備門生が寄々評議した。當時學生は皆和服に袴を着けて居つた。資力の點もある故、先づ帽子のみ一定せんと各自案を持寄つたが、自分の發案が採用せられ、之を大倉組に試作せしめた。山口莊吉君と自分とが世話人に選ばれ、兩人の證明切符を以て大倉組より買求むることとし、成るべく多數着用するやう勸誘した。之は明治十七年十月であつたと思ふ。翌十八年春夏帽用として、麥稈帽に玉蟲色甲斐絹鉢巻を用ひることとした。(夏帽は其の後正式制定の時省かれた)此の帽子こそ、今日まで其儘襲用せられて居る角帽其物である。また帽子の徽章も帽子と同時の考案にして、是又今日まで用ひられて居るのである。然るに十八年七月限り、一ツ橋東京大學も虎の門の工部大學校も東京大學の醫學部も合併せられ、帝國大學として今日の本郷臺赤門内に移つた。而して二十年九月文部省により正式に今日の正服正帽が制定されたといふ。

記者(眞田)思ふに、此の角帽の案出には、當時東京大學には、スコットランド人教師多く、同國人學士がガウンを着けた時、冠つた角板型冠り物よりヒントを得たものと思ふ。

### 制服のこと

帝國大學五十年史(上卷一〇八九頁學生制服)によれば、明治十九年四月二十八日大學院及び分科大學々生の服制を定め、十一月十一日より實施することと爲す。今日、本學々生に

於いて使用しつゝある服制は、大體に於いて此時定められたるものなり。當時一般には其の例を見ざりし所にして、本學は他に先んじて服制々定を行へるなり。蓋し取締上の必要もありしなるべし。(文部大臣には四月十六日圖入りの服制々定の伺を大學より出し、認可を得たるものなり。)

帽子は其の形を歐米諸大學に倣ひ、後遂に大學全般に使用さるゝに至れるものなり。

附 録 (第四)

内務省雇傭工師の報告書名表

ドールンの調査計畫せる文書の現存せるもの左表の如し。凡例 沿河利根川改修沿革考 東京内務省東京土木出張所 大阪大阪土木出張所 治水治水雑誌

ドールン

年月日	文 書 名	文書所在
明治五年二月	東京着來朝	
〃 五、一〇、九	大阪築港手段(大阪築港の計畫)	東 京
〃 〃	大阪波止堤圖(防波堤標準圖)	大 阪
〃 六、一、	諸河の改修及大阪京都琵琶湖間に通船を開く考按(淀川改修、土砂流出京都琵琶湖間運河、東高瀬川改修、西高瀬川改修、西高瀬川改修大井川改修)	東 京、大 阪
〃 六、二、四	治水總論(河川工學を詳述す)	治水一、二、四五
〃 六、二、五	日本水政第十八號、河川改修の考案(河川工法を述べ江戸川を例示す)	治水、東 京
〃 六、三、二五	日本水政第二十四號、土砂留の件	小野土木寮頭宛

〃 六、二、六	(不動川砂防工事の視察復命書)、	石井土木助宛	東 京、大 阪
〃 六、三、二五	日本水政第十號、器械等講求の件	土木寮石井書記官宛	治水、東 京
〃 六、六、一八	日本水政第二十二號、砂川の件	石井土木助宛	東 京
〃 六、七、一五	日本水政第三十二號、大津より京都迄の間道路管轄の趣旨		〃
〃 六、一、一	日本水政第三十三號、馬車鐵路(東京府下馬車鐵道免許規則を答申せるもの)	土木頭小野義真宛	東 京
〃 七、一、八	兵庫港川修築見込書	土木頭小野義真宛	〃
〃 七、	横濱港計畫	土木頭小野義真宛	横濱築港誌、日本築港史
〃 七、一、八	粗朶伐採の件	土木頭小野義真宛	東 京
〃 七、二、二〇	(淀川に要する粗朶類の數量價格を算出せるもの)		東 京
〃 一〇、二、	日本水政第七十八號、淀川改修(エッセル、デレーケ、チッセン三工師の調査計畫に對する副書)	林土木頭宛	大 阪
〃 一〇、二、二一	野蒜港計畫	内務卿宛	日本築港史
〃 一〇、二、二四	日本水政第一一八號、水戸運河(常陸大谷川運河計畫に對する視察復命)	石井土木局長宛	治水、東 京
〃 一一、二、二二	日本水政第一二二號、吉田用水溝(鬼怒川筋吉田用水路視察復命)	石井土木局長宛	治水、東 京
〃 一一、二、二二	日本水政第一四三號、(本宗道地先鬼怒川工業の件)	石井土木局長宛	治水、東 京

明治二二、一、五一  
〃 一三、二、二

日本水政第一四七號(猪苗代湖疏水工事調査復命)  
辭職歸國

石井土木局長宛

東京

リンドウの内務省に報告せる文書現在せるもの左の如し。

リンドウ

年月日  
明治五、二、來朝  
〃 五、  
〃 六、  
〃 六、  
〃 八、 歸國

利根川測量  
日本治水の説(江戸川改修計畫を述ぶ)  
大河水津分水調査  
(分水工事は河口を悪化せしむるものとの意見なり)

文 書 名

文書所在

利根川改修沿革  
考  
内務省東京市土  
木出張所  
日本築港史

エツセルの内務局に報告せる文書の現存するもの左の如し。

エツセル

年月日

明治六、九、二五  
〃 六、一、一八  
〃 七、一、一三

來朝  
文 書 名  
淀川筋高低測量及深淺測量のため必要の件々上申  
河川改修附録第五、大阪より伏見に至る淀川改修の價算表作製(四十一

文書所在

〃 七、一、一六  
〃 七、一、一四  
〃 七、  
〃 八、五、六  
〃 八、六、一二  
〃 八、九、二一  
〃 八、一〇、一三  
〃 九、六  
〃 九、四、四  
〃 一二、

萬七千二百餘圓を計上)  
河川改修附録第六、大阪より伏見に至る繰越裝置價算の概略(六萬四千四百圓を計上)  
淀川運正書 ドールン宛(ドールンは之に副伸書を附し政府に報告せり)  
(大阪伏見間通航の爲の計畫にして五尺の水深を維持せしむる案)  
河川改修附録第一、澁川改修大意  
桂川改修説(デレーケ共述)  
丹波大井川改良通船計畫の件(岩石爆破の方法を述ぶ)  
淀川水深を維持せしむる工法に付試用方上申  
桂川改修價算表(改修費九萬八百五圓を計上、圖面七葉添付)  
越前坂井港計畫(敦賀縣の上申により九年六月及十二月調査し其後に報告す。工事は十一年五月着手し初めエツセル、後デレーケ監督したり)  
中津川分疏の件(淀川改修の一部計畫)  
新潟港調査(ムルデルと共に調査し主として信濃川河身改修計畫を立つ)

内務省大阪土木  
出張所  
内務省東京土木  
出張所  
内東土木、内大  
土木  
内大土木  
内東土木  
内大土木  
内東土木  
日本築港史  
内大土木  
日本築港史

デレーケの内務省に報告せる文書左の如し。(此外にも多數の調査報告あるけれども調査不能なり。)

デレーケ

凡例

治水雑誌  
東京土木出張所  
内務省東京  
内務省大阪  
内務省新潟  
内務省名古屋  
新大東治  
名古屋

年月日	文 書 名	文書所在
明治六、九、二五來	柴工水刃(工法詳述の編者にして我國沈床工の規範となる)	東京、土木工要録
〃 六、一一、	長工師ドールン宛	東京、大阪
〃 七、(?)	砂防工法圖解	東京
〃 七、一〇、	河川改修附録卷四、各種工營具の價算	東京、大阪
〃 七、一〇、一五	淀川改修土砂阻塞の件(之等は我國砂防工法の規範となれり)	東京、大阪
〃 七、一二、七	(土砂流出手當、(各種の砂防工法を説けるもの)泉谷溪渠の施工、木津川浚渫工、操作の程度及經費概算)	東京、大阪
〃 八、五、五	大阪末流目論見(天満橋より海に至る航路改修計畫)	東京、大阪
〃 八、五、五	桂川施業順序(エッセル共述)	東京、大阪
〃 八、五、六	桂川改修説(エッセル共述)	東京、大阪
〃 八、一二、七	阪港目論見(上下二冊)	東京、大阪
〃 八、	(大阪築港計畫及市内通航計畫なり)	東京、大阪
〃 八、一〇、一二	築港(大阪)目論見物料表	東京、大阪
〃 九、七、二九	天保山築港計算表(工費金八十萬四千圓案)	東京、大阪
〃 九、一〇、三〇	宇治川及大池疏通の件(京都府提出の計畫に對する意見なり)	東京、大阪
〃 一〇、一〇、一二	天満橋以下改修計畫	大阪
	淀川支流穗谷川流末の方向不可なるを以て附替のことを提言し決裁を得	大阪

〃 一〇、一二、六	長崎港埋浚渫及港内規則の件(築港計畫及港内取締規則制定を記述)	長崎縣令宛	〃
〃 一〇、	澗川改修築工水刃概略(エッセル共述)	長崎縣令宛	〃
〃 一一、	坂井港(越前)工事監督	東京、大阪、土木工要録	〃
〃 一一、四、一	木曾攝斐長良及庄内川流域概況(木曾川下流の改修計畫なり)	日本築港史	大阪
〃 一二、七、八	博多港略圖進呈の件(福岡縣出願に對する副申にして工費十萬圓にしては不足の旨を述べ)	石井土木局長宛	大阪
自明治二、七、	木曾川改修計畫意見、同川及支派川の河川監督上の意見具申	内務省宛	大阪
至明治三、三、	木曾川流域岐阜以西山林の件(山林伐採甚しきを以て砂防工事施行の必要を上申)	石井權大書記官宛	名古屋、東京
明治三、一一、二七	庄内川山丘土砂流送の件(伐採を禁止せざれば大規模の砂防工事が必要とする旨を上申)	石井權大書記官宛	大阪
〃 三、一二、四	大阪港調査	石井土木局長官	大阪
〃 一三、	福岡港内放水開築設の件	石井土木局長官	大阪
〃 一三、二、二	耕地及何流除害法即山林樹木伐採禁止、山地樹木植栽、土砂打止工事の必要を上申	石井土木局長宛	大阪
〃 一三、二、一八	淀、木曾兩河流域樹木保護の件に付上申	石井土木局長宛	大阪
〃 一三、二、二二	(一月二十二日及二月二十一日法令を以て取締るべき事を上申せり)		大阪

明治一三、五、一三

新神崎川悪水路修治の件(大阪府の出願により調査し意見を上申す)

大 阪

一三、六、三

山林保護の件(山林保護の方法を詳述す)

石井大書記官宛

一四、八、二〇

宇品築港京橋川宇品島間海堤建設の件

石井土木局長宛

一四、

淀、木曾兩河流域樹木保護の件

石井大書記官宛

一四、八、二三

木曾川流域砂防工費の件

石井大書記官宛

一四、八、三〇

(施行中の工費二萬七千八百圓を十萬圓に増額の意見、及其一部は地元に分擔せしむる意見)

石井大書記官宛

一四、九、一〇

淀川改修費及砂防費分配の件(明治十四年度工費六萬圓の内二萬圓を淀川改修費に充てたるに對し増額方上申せるもの)

石井大書記官宛

一四、一〇、五

福岡港内放水開築設の件及築港費節減計畫の件

石井土木局長宛

一五、九、三〇

長崎港内浚渫の件

石井土木局長宛

一五、一、八

(港内埋没を調査し浚渫の必要を上申す)

石井土木局長宛

一五、一、二、三

宇品築港の件(明治十四年復命せる計畫に對する説明)

石井土木局長宛

一六、一、三

長崎港計畫圖の件(圖面進達の副書)

石井土木局長宛

一七、五、四

宇品築港の件(廣島縣よりデレレーケの計畫に對し多少の變更を申請ありしに對し其意見を上申す)

島土木局長宛

一〇、四、一八

横濱港計畫(乾船渠築設計畫に際し併せて築港計畫意見を上申せるもの)  
大阪築港及澱川高水修治の件上申  
(改修計畫及築港計畫を詳述し淀川放水路の必要を述べ)西村土木局長宛  
利根運河計畫改訂(ムルデル共述)  
大阪港及澱川高水路改修改正計畫  
西村土木局長宛  
大阪築港引込鐵道計畫(圖面を添へ追申せるもの)  
西村土木局長宛  
横濱港計畫意見(パルマー案を検討せるものにして、之より優越せる案なりしも政府パルマー案を實施したり)  
西村土木局長宛  
東京港計畫  
西村土木局長宛  
東京築港意見  
西村土木局長宛  
淀川大和川調査復命書  
古市土木局長宛  
日本治水上に係る所見  
治水協會西村拾三宛  
(メイクの北海道河川改修意見の反對論を試み内地河川の改修及維持を國費を以てすべき事を力説す。)

二四、三、一八

多摩川調査報告(多摩川改修工事を視察復命せるもの)

古市土木局長宛

二四、六、二八

蘭國卑濕地の狀況(歐洲諸所の平均水位に就て述べ、併せてアマスターダムの基準水面を説く)

治水雜誌卷 五

二四、一、一九

水源涵養法施行緊急の主意

治水卷 四

二四、二、二四

加賀、越中、河川港灣視察報告(計畫もあり)

古市土木局長宛

二四、五、五

富山縣、東京

二四、三、一八

治水卷 九

二四、一、一九

治水卷 四

二四、一、一九

治水卷 七、八

二四、一、一九

治水卷 七、八

二四、一、一九

治水卷 七、八

二四、一、一九

治水卷 七、八

二四、一、一九

治水卷 七、八

二四、一、一九

治水卷 七、八

二四、一、一九

治水卷 七、八

二四、一、一九

治水卷 七、八

二四、一、一九

治水卷 七、八

二四、一、一九

治水卷 七、八

二四、一、一九

治水卷 七、八

明治二六、	越中常西合口用水計畫		富山縣
〃 二六、一〇、三一	仙臺灣内築港調査		日本築港史
〃 一〇、九	大阪築港水堤構造設計書		大阪市役所、東京
明治二六、二、二〇	天保山沖海底土質に關する上申書		〃
〃 二七、三、二	大阪築港用混凝石成分辨明豫算書		〃
〃 四、二	大阪築港計畫書(第一編大體の辨明)		〃
〃 五、四	〃 (第二編 構造方、施行方)		〃
〃 七、二五	〃 (第三編沿岸の變化、新港附近海底變化) 同		〃
〃 三四、歸國	澁川洪水防禦工事(改修工事)計畫に對する意見(沖野技師計畫に對する意見書なり。)		〃
	澁川洪水防禦工事(改修工事)計畫に對する意見(沖野技師計畫に對する意見書なり。)	古市土木局長宛	〃

ティッセンの内務省に報告せる文書の分明せるもの左の如し。

ティッセン

文 書 名

文書所在

明治六、二、一五東京	澁川測量		内務省東京土木出張所
着來朝 三、八大阪着	試驗的に粗梁工沈工を澁川筋京橋に作り其成績を見て上流沙川々域内にも試験操作を始める様大阪出張土木寮に上申す。		〃
〃 七、一〇、一五	「澁川理正なる報告書をドールンに提出す。ドールンは之に副伸して澁川は僅少の費用にて干潮時五尺の水深を得べしと政府に報告せり。		〃
〃 七、一一、一四			〃

ムルデルの内務省に報告せる文書の現存せるもの左の如し。

ムルデル

凡例 東京 内務省東京土木出張所  
新潟 新潟  
大阪 大阪  
沿 利根川改修沿革考

文 書 名

文書所在

明治二、三、二五	新潟港調査(エッセルと共に調査し主として河口改良計畫を立つ)		日本築港史
〃 〃 〃 二、	東京港計畫に對し意見書提出	石井土木局長宛	日本築港史
〃 〃 〃 二、二四	利根根川筋中條村用水路の件復命(見沼代用水の改良計畫)	石井大書記官宛	東京市史稿
〃 〃 〃 一、四、四、二一			沿、東京
〃 〃 〃 一、四、一一	三角港調査		沿、東京
〃 〃 〃 一、六、	函館港調査報告(函館縣令の上申により調査し復命せるもの)		日本の港湾
〃 〃 〃 一、六、三、二七	鬼怒川本宗道地先粗梁工の件	石井土木局長宛	日本築港史
〃 〃 〃 一、六、九、一三	(明治十五年の洪水にて破壊せる箇所之工事説明)		沿、東京
〃 〃 〃 一、七、	富山縣下河川調査	石井土木局長宛	沿、東京
〃 〃 〃 一、八、二、七	(庄、八矢部、神通、常願寺、早月、布施、黒部の諸川改修方針)		新潟、東京
〃 〃 〃 一、八、二、二五	野蒜港調査(英人ジェームス外二人と共同調査にして十一年以來ドールンの計畫により施工中のものを此調査により中止となる)		日本築港史
〃 〃 〃 一、八、三、九	備前渠改修計畫	三島土木局長宛	沿、東京
	三ヶ尾運河(利根運河)計畫		沿、東京
	中田栗橋間利根川鐵道橋調査(利根川水理上の意見を上申)		沿、東京

明治一九自一、二、三、五、二、三	技師補近藤仙太郎、屬小林定業、阿山川純孝を助手として利根川改修計畫及豫算書を作る		
〃 一九、四、七	利根川低水工事計畫	土木局長中村孝禱宛	東 京
〃 二〇、六	デレーケと連名にて三ツ堀運河(利根運河)計畫訂正書提出	西村土木局長宛	〃
〃 二〇、一二	横濱港計畫意見書(英人パルマーの案を再調せるもの)		横濱築港史
〃 二〇、九、二七	大阪港改築淀川洪水修治計畫調査意見書	西村土木局長宛	東京、大阪
〃 二〇、	利根運河計畫改訂(テレーケ共述)		沿、東 京
〃 二二、	下關港調査計畫		日本築港史
〃 二二、二、二八	利根運河開鑿工事の緩慢なるに付善處方上申	土木局長中村孝禱宛	
〃 二二、五、二歸國			

メークの北海道廳に提出せる報告左の如し。

メ ー ク

明治二〇、六來朝	第一回北海道港灣調査報告(根室、花咲、釧路、濱中、厚岸、網足、佐呂間、留萌、石狩等の設計及設計圖並經費計上)浦河港調査報告 岩村長官宛	文 書 名	文書所在
〃 二一、	第一回調査諸港の水附地質調査並びに室蘭、釧路兩港及猿澗湖、十勝、六津、天鹽、諸川量水標設置		北海道廳

〃 二二、一	江差港、第一報告		
〃 二二、五	函館港調査計畫報告		
〃 二一、一〇、	石狩川水運による空知炭搬出調査計畫報告		
〃 二一、二、	室蘭砂原に關する調査計畫豫算報告		
〃 二二、三、	第二回石狩川水運による空知炭搬出調査報告		
〃 二二、五、	石狩川河口に於ける築堤防禦に關する報告		
〃 二二、六、	鯨漁業の根據地的漁港として虻羅の調査設計報告		
〃 二二、七、	室蘭港と石炭積込設備及築港調査設計報告		
〃 二二、自八、	小樽港調査計畫、江差港第二回調査設計報告、第三回空知炭搬出調査設計報告		
〃 二二、四、歸國			

昭和十七年二月十二日印刷  
昭和十七年二月十五日發行

非賣品

東京市牛込區南町三三番地

編輯者兼  
發行所

中村孫一

東京市神田區美土代町一六番地

印刷者 倉澤直男

東京市神田區美土代町一六番地

印刷所 株式會社 三秀舍

東京市麴町區丸ノ内三丁目六番地

發行所

法團 土木學會